

505
8

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 1 2 3 4 5

始



朝日新聞

505-8



童話新集

賢い小犬

順三郎著

童話
大膽な娘

橋が落ちたも
知らないで
汽車がドンク
やつて来た
止めて下さい
その汽車を
大きな聲で
飛んで行く

正
大正
11. 1. 27
内交



大 膽 女 娘



見出

- 1 二人馬鹿 (頁二)
- 2 失敗少年 (頁九)
- 3 小羊の智慧 (挿書) (頁一六)
- 4 賢い小犬 (挿書) (頁三三)
- 5 大膽な娘 (口繪) (頁四一)
- 6 秘密な使 (挿書) (頁五〇)
- 7 九死一生 (頁六一)
- 8 泥棒釣り (挿書) (頁六九)
- 9 兄妹喧嘩 (挿書) (頁七九)



- 10 料理の匂ひ (頁八八)
- 11 優曇華の花(挿書) (頁九六)
- 12 金魚と蛙 (頁一〇六)
- 13 鶯の念佛(挿書) (頁一一二)
- 14 禿頭と林檎 (頁一二五)
- 15 張番小僧 (頁一三六)



新童話集 賢い小犬

順三郎著

二人馬鹿

日の暮れ方、茶目吉は釣さを肩にかけて大川の方へ出かけて行きました、すると、向ふから来たのが仲間の三太郎、同氣相求むる悪戯同志です、
「茶目ちゃん、何處へ行くんだい」

二人馬鹿

「僕、釣に行くんだよ、君も一所に來ないかい。」
「あゝ、行かう。」

そこで三太郎は、茶目吉の後についてノコノコ大川へ
行きました、川岸の石に腰をかけて、釣ざをを下ろすと
一生懸命水の上をにらんで居る、中々つれそうも無いか
ら三太郎は飽きて來ました、

「茶目君、もう歸らうぢやないか。」

「まだいゝやね、これから君ウンとつれるんだぜ。」

「だつて君、僕は君の釣つた所を見たことは無いぜ、時
に針にかゝると思やア古い下駄位ぢやないか、古下駄を



つるんなら錢湯へ行つた方がいゝぜ。」

「何を言ふんだい、錢湯で魚がつかれるもんかよ。」

「魚ぢやない古下駄さ。」

「僕ア古下駄をつりに來たんぢやないや。魚をつりに來
たんだ。」

「だつて、古下駄だの、古草履だのばつかり引かゝるぢ
やないか、いつそ君、塵芥溜をさがした方がいゝよ。」

「シツ、シツ靜かにし給へ、ヘラズ口を叩くなよ、魚が
逃げつちまはア。」

「君々、それ浮子が動いたよ、あげ給へ。」



『よし来た、ソレツ。』
と、釣竿を持ち上げると、目の下一尺ばかりの鯉がかゝつて来ました、けれども如何したはづみか、鯉は針を外れてバラ／＼と地に落ち、得たり賢しと逃げやうとしたのを、三太郎が飛びかゝつて、鯉の胴中をたさへました、

『やア、三ちゃん有り難う。』

と、茶目吉が手を出さうとすると、どつこい左様はさせぬと、三太郎は鯉をつかまへた儘離しません、

『何言つてるんだい、こりや僕んだよ。』



『僕んだ、僕が釣つたのだから僕んぢやないか。』

『うろ言ふない、僕が捕まへたんだから、僕のぢやないか。』

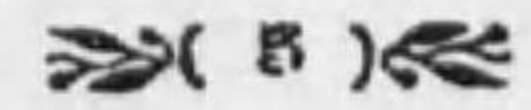
『失敬なことを言ふない、僕がつらなきあ捕へることは出来ないぢやないか、三太郎の馬鹿め。』

『やあい、僕が馬鹿なら貴様は間拔だ、折角釣つた魚を落す間拔が何所にあるもんだ、離さないか。』

『離すもんか馬鹿野郎。』

『殴るぞ。』

『何ッ。』





大けんくわに成つたのです、打つ、蹴る、引搔く、喰ひつく、上になり下になり、取組合を始めました、其の時、向ふの方から來かゝつた大人が一人、この人もつりに來たものと見えて釣竿を肩にかつき、大きな魚籠を持つてゐます、茶目吉と三太郎がけんくわをして居るのを見て驚いて中に入り、

「おい／＼如何したと云ふのだ、友だち同志でけんくわする奴があるもんか。」

と、言ひますと、茶目吉は、

「あのね叔父さん、三太郎の奴、僕の釣つた鯉を自分の



ものだなんて、言ふんだよ、だから僕、怒つちやつたんだ。」

と言ひますと、三太郎も負けては居りません、

「何を糞ツ、釣は釣つたけれども、下手くそでつり落したのを、僕が途中で捕まへたから、僕のものだつて言ふんだい。」

「何を僕のだい。」

「ウンニヤ僕ののだ。」

「コレ／＼、二人とも又けんくわをするのかい、こんな小さい鯉でそんな大さわぎをする奴があもんか、けんく



わの種はこの鯉だ、おれがこの鯉を貰つて行くよ、そしてたら二人ともけんくわをする事は無いだらう。』

こ、他所の伯父さんは、鯉を自分の魚籠の中へ入れしまひました、そして、

『さあ、二人ともけんくわを止めて家へ歸んな。』

と、言ひながらズン、ズン、行つてしまひました、あそこで茶目吉と三太郎は、

『おやく。』

『なあんだ詰らない。』

と、べそをかいて居りましたとさ。

二 失敗少年



優太郎と久次郎は本當の兄弟ですけれども、兄の優太郎はどつちかと言へば少し氣長で、口數が尠ない温順しい性質でしたが、弟の久次郎は活潑で急性で、少し亂暴でした、然し二人とも勉強家で、兄弟の仲はいい方でした、

それは丁度天長節の前日でした、二人は御母さんからお金を頂いて髪をかりに行きました、いつも行きつけの海老床へ行ききました所が、天長節の前日ですから、お



客が非常に混んでゐました、職人が三人もゐるのですが十人もた客が待つてゐましたから、急性の久次郎はそれを待つてゐることは出来ないのです、

「兄さん大變お客が混んでゐるねえ、十人も待つてゐると、遅くなつちまふから、何所か他の家へ行かうちや無いの。」

「今日は何所へ行つても空いてはゐやしないから、他店へ行よりや此店で待つてゐてかつた方がい、よ。」

「だつて十人も待つてゐるのは待ち遠いぢやないか、理髪店は二軒や三軒ぢやないもの、いくらも空いてゐる家があ

りそやなもんぢやないか。」

「そりや有るかも知れないけれども、此店だつて、三人してかるんだもの仔細はありやしないよ、辛抱して此店に待つてゐた方がいいよ。」

『でも待つてゐるのは大變だからなア、ぢや兄さんは此店に待つといでよ、僕ア、何所隙いてゐる理髪店を見つけて刈つて來やう。』

兄さんの優太郎が何と言つても訊き入れないで、弟の久次郎は他の家を探して歩きました、然し何所へ行つても隙いてゐる家はありません、大がい六人や七人位づゝの



た客の待つてない家はありませんでした。

もう十五六軒も歩きましたが、一軒もすいてる家がないので、さすがに氣短か先生の久次郎も少し後悔して來ました、兄さんの言ふ通り海老床で待つてりやよかつたそうすりやもう自分の番が廻つて來てゐるかも知れないと思ひましたが、もう仕方がありません、そのうちに日は暮れて來ました、お腹も空けば足も疲れて來ました、そこで、ある理髪店へ飛び込んで、泣き聲になつて、



『すぐ刈つとくんな。』

と、頼みました、然し、その家にも五六人のお客様が

ゐました、理髪店の職人は振り向きもしないで、

『まだ少々間が御座います。』

『僕、いそぐんだから。』

『急ぐのは坊ちゃんばかりぢやありません、皆様がお急ぎなのですから。』

と、ことわられて、すごくと飛び出して、六七八軒歩きました、理髪店と云ふ理髪店をすつかり歩きました、が、何所へ行つてもすいてる家はありません、その夜は更けて來るし、お腹は空つて來るし、足は疲れて來るし仕方がないので泣面になつて家へ歸りました、





見ると、優太郎は初めに行つた理髪店に待つてゐたので、すぐに番が来て綺麗に頭をかつて、家へ歸つてゐました。みんな久次郎が歸らないので心配してゐました。久次郎は大層お母さんに叱られました。

天長節の日が来ました、學校へ行つて見るとみんな綺麗な頭髪をしてゐます、汚ないのは久次郎一人です、講堂へ並んだ澤山の生徒を見て、校長先生はすぐに久次郎の汚ないのを見つけました、兄さんの優太郎は綺麗になつてるのに、久次郎ばかりが汚ないものですから、校長先生は不思議に思つて、



「久次郎さんば一体どうしたのですね。」
と、御訊きなさいました。

隠す譯には行かないので、久次郎は昨日の話をしました、校長先生は黙つて訊いてゐましたが、やがて式が始ると、天長節の御祝ひの言葉があつてから、日本の國が一年や二年で立派な國になつたのではない、人間もまた一足とびに豪くなることは出来ないものだと云ふことをお話して、優太郎と久次郎のここを例に引いて、
「世の中と云ふものは中々思ふやうになるものではない、ありません、一つの仕事を成し遂げやうとするには、靜かに

時の来るのを待たなければなりません、思ふやうに成らないからと言つて、むやみに急いだり、心を變へたりすると、終には何にも出来ないものです。』

と言ひました。

その後久次郎は急性の氣質が直つて、落ちついた子供になりました。さ。

三 小羊の智慧

お山の穴の中に、七疋の小羊が、二疋の母さん羊と仲よく暮してゐました、毎朝お乳を吞ましたあとは、一緒



に山や野へ餌を拾ひにつれて行くのですが、今日は寒いから小羊は内に留守番をさせてをきました、

『お母さんの留守に、みんな喧嘩しちや不可いよ、喧嘩などをしてゐるご外から狼が飛んで来て食べてしまふからね、温順しくお留守番をしてゐるのですよ。』

と、お母さんが言ひますと、小羊は口を揃えて、

『ね、温順しく留守居をしてゐますよ。』

『それからね、むやみに戸を開けては不可いよ、外からお母さんが歸つたよといつても滅多に開けるのぢやないよ、そしてね、御手をお出しつて言ふのだよ。』



「御手を見るの。」

「あゝ、お母さんの御手は白くつて、柔かいだらう、だ
けこそ、狼の御手は黒くつて、ざら／＼してゐるから、
よく氣をつけてね、い、かい。」

さう言つてお母さんは出て行きました、お母さんが居
なくなる、小羊どもはもうお母さんの言つた事などは
忘れてしまつて、鬼ごっこをするやら、隠れんぼをする
やら大さわぎです、餘り大さわぎをやつてるので、近所
にゐる狼が、

「はゝあ、こりやあの母羊がゐないのだ、よし／＼ひと



つ欺かして小羊の御馳走になるとしやうかな。」

こ、のそ／＼とやつて來ました、そして尻尾で表の戸
をとん／＼と叩いて猫なで聲を出して、

「これ／＼、お母さんが歸つたよ。」

中では大さわぎをしてゐたが、お母さんの聲がしたの
でびつくりして、

「たや／＼お母さんだ、今明けますよ。」

と、戸をあけやうとする、一番終つ子の小羊がこれ
をとめました、

「待つて／＼、開けちや不可いよ。」



『何故、どうして。』

『でもさ、お母さんがすぐ明けちやいけないって云った
ぢやないの。』

『さうだ、すっかり忘れてゐた、ひよつとするご狼
かも知れない、ひよつ聞いて見やう、もしくお母さん
なら御手を見せて頂戴。』

と、言ひました、狼はそらごいつて真黒な手を戸の下
からぬつと出しました、

『やア、狼だく。』

『開けちやいけないく。』



と、寄つてたかつて戸を押へて中々あけません、狼は
失敗つたので、すごくと、山の中へ歸らうとしました
が、

『まてく、ひとつ手を白くして行つてやらう。』

と、近所の水車へ飛んで行つて、番人のるすを幸ひ、
粉箱へ手を突込んで真白にして來ました、

『お母さんだよ、開けとくれ。』

と、言ひながら尻尾でとんく戸をたゝきました、

『そんなら御手見せて頂戴。』

『そら、この通り真白だ。』





小羊の智恵

と、出したのを見ると、なるほど眞白でしたから、小羊どもは喜んで、

「やア、今度は本当のお母さんだ。」

と、戸をあけやうとしますと、また末つ子の羊が、

「まつてく、明けちやいけないよ。」

「何故、御手が白いもの。」

「御手が白くつても、もしかしたらザラくしてゐるか
も知れないよ。」

「さうだつたね。」

と、さわつて見ると大變、ザラくしてゐて丸で針の



童話

小羊の智恵

正男作

可愛い山羊を

みんな喰べて

木かけて眠る

狼を

お母さんがコツソリ

やつて来て

お腹を飲んで

チヨーキチヨキ



小羊の智慧

と、出したのを見ると、なるほど眞白でしたから、小羊どもは喜んで、

『やア、今度は本當のお母さんだ。』

と、戸をあけやうとしますと、また末つ子の羊が、

『まつてく、明けちやいけないよ。』

『何故、御手が白いもの。』

『御手が白くつても、もしかしたらザラくしてゐるか
も知れないよ。』

『さうだつたね。』

と、さわつて見るご大變、ザラくしてゐて丸で針の



童話

小羊の智慧

正男作

可愛い山羊を

みんな喰べて

木かけて眠る

狼を

お母さんがコツソリ

やつて来て

お腹を餓で

チヨーキチヨキ



やうです、

「わッ、狼だ、明けるなく。」

と、寄つて集つて戸を押へてゐますから、どうしても
入ることは出来ません、狼はまた悄然と歸りかけました
が、こんごは松の木まつの澤山たくさんあるところへ行つて、松脂まつぎを
べつたり塗つて來ました、

「明けとくれく、お母さんだよ。」

「御手を御見せ。」

「そら、この通り、白くつて柔かいよ。」

こ言つて戸の下から出した手を見ると成る程白い、さ

わつて見ると松脂でベト／＼してゐますからやわらかです、

「やアお母さんだ。」

「今明けますよ。」

と、戸をあけるが早いか、踊り込んだのは手ばかり白い狼、逃げまわる小羊を追ひかけ、みんな丸呑みにしてしまひました、大分お腹がふくれて来たので、いい心持になつてのそ／＼山の方へ歸つて行きました、

そのあとへ、今度は本當の母羊さんが歸つて来ました、さぞ小羊が待つてゐるだらう、早く歸つて御馳走をして



やらうと思つて歸りますと、こは如何……戸は明けつばなしてす、

「たや、如何したのだらう。」

と、びつくりして中へ入ると、小羊は一疋もゐません、狼の足あとが一面についてゐます、

「まあ如何したのだらう、あの可愛い子供はみんな狼に食はれつちやつたのかしら、本當に、如何したらよからう」

悲しくつて、心細くつて、母羊はおい／＼泣いてゐました、すると戸口の方で小さな聲で、





「お母さんく〜。」

と、言ふ者がありません。

「たや、まだ誰か生きてゐたのかしら、何所どこにゐるの、何所どこにゐるの。」

「お母さん、此所ここですよ。」

「おや、あの聲は末子の聲だよ、お前何所どこにゐるの。」

「此所ここですよ、戸袋の上ですよ、お母さんもう狼おおかみは行つちやつたの。」

と、戸袋の上でふる〜慄おそへてゐます、大いそぎで下してやりますと、小羊こひつては泣きながらお母さんにしがみつ



きました。

「お前まへよく逃げられたね、そして兄にいさんや姉あねさんたちは如何どうしたの。」

「あたね、狼おおかみが入つて来ると、いきなまり戸袋の上へ逃げ上つたの、兄にいさんや姉あねさんは、みんな狼おおかみに丸呑みになされつちやつたよ。」

「あの狼おおかみがかい、何だつて又戸またとをあけたの。」

「だつてね、御手かてに粉こなをつけて眞白ましろにして、松まつやにをぬつて毛けをやわらかくして来たんだもの、だまされつちやつたの。」

と、言つて、初めからのことをいろく話し出しました。

「悪らしい狼だこと、それぢや母さんが仇討をしてやるから、末ちゃんもおいで。」

と、末の子羊をつれて急いで山へ行つて見ます、大きな松の木の下で、心持ちよさそうに狼が、大軒をかいて眠つてゐました、小羊は踊りあがつて、

「あたよ、く。」

「静かにおしよ、起きるご不可いから。」

狼は大きなふくれたお腹を上に向けて、グウく大軒



をかいてゐます、そうつと近よつて狼のお腹を撫で、見ると、中ては何だか、小羊かムクく動いてゐるやうです、

「末ちゃん、お家へ行つてね、鋏と、糸と針を持つといで。」

「ごうするの、お母さん。」

「狼のお腹を破つてやるの。」

「さう、嬉しいなア。」

末の小羊は大いそぎで、エツチラク言ひながら針と糸と、大きな鋏をかついで來ました、母羊はその鋏をも





つて狼のお腹の皮をポリポリと切り初めましたが、狼は何にも知らはいで、グウ〜眠つてゐます、ポリ〜とだん〜切つてゐますと、一疋ひよつくり飛び出しました、

「たや〜御母さん。」

「シツ〜、静かに〜。」

と言ひながら、ポリ〜切つて行きますと、ひよつくり〜、とう〜六疋みんな出ました、狼は餘程お腹が空いてゐたと見えて丸呑みにしたものですから、小羊は少しも傷もしませんでした、



「さあ〜、みんな小石を拾つといで」

と、母羊が言ひました、

「どうするの。」

「小石をね、狼のお腹へ詰めこんでやるのさ。」

「たや、面白いね。」

「早く拾ひませう。」

と、てんでに小石を拾つて來ました、母羊は、狼のお腹にその小石を一ぱい詰めて、そのあとを元の通り糸と針で縫つてをきました、狼はまだグウ〜、寝てゐます、



『さあかへらう、これでいい。』

小羊をつれて大いそぎで家へ歸つてしまひました、そのあとで、狼は目をさましたが、やつぱりお腹がふくれてゐるから少しも氣が付きません、

『たやく、何だか先刻より重くなつたやうだぞ、ガラ／＼音がするぞ、これ／＼小羊ども、鬼ごつこなんかするなよ。』

大きなお腹を引きずりながら、小石が詰つてるとは知りませんから、ウンウン言ひながら谷川のそばまで来て水を飲うと思つて首を伸すとお腹の重みで前へのめつて



川の中へドブ／＼、ブク／＼とその儘沈んでしまひました、

『やあ、萬歳。』

母羊と小羊は、狼のあとからやつて来て、手を打つて喜んでゐました。

四 賢い小犬

ある日、三郎が學校から歸つて來ますと、田圃道で二人の悪戯兒がわい／＼騒いでゐます、何をしてゐるのかしらと其傍へ近寄つて見ると、可哀想に一疋の小犬を

賢い小犬

荒縄で縛つて玩具にしてゐるのです、根が情け深い親切な三郎はどうも可哀想で仕方がありません、

「君、そんなに犬を、いちめるもんぢやないよ、やめ給へ。」

「何言つてるんだい、僕たちの犬を僕たちが窘めるんだい、構ふもんか。」

と言つて訊きません、そこでいろく考へて、其の犬を貰はうと思ひました、

「ちや君たち、その犬を僕に呉れ給へな、厭かい。」

「何が呉れるかい、犬のかはりに何か呉れるんなら犬を



遣つてもいい。」

「錦繪と取替へて呉れないかね。」

「錦繪、何の錦繪だい。」

「此の間東京の叔父さんが来たときに、お土産に貰つたのだよ、二重橋だの、観音様だの、銀座の町だの、三人だから三枚あげるよ。」

「東京の錦繪かい。」

「ああ、東京のさ、二重橋と観音様と銀座のだから、中々どうして綺麗だよ、ほら御覽。」

と、三郎は鞆の中から美しくしい錦繪を三枚出して見せ



ました。

「綺麗だなア、それなら取りかえてもいいや、ねえ君たち。」

「いゝともく、取り替わやう。」

こ、すぐに承知しました、三郎は喜んで錦繪を三人の悪戯兒に渡し、小犬を引つばつて家へ歸りました、お父さんや、お母さんも、三郎のした行爲を、大層褒めました。

犬にはボチと云ふ名をつけました、可愛がつて大切に育てました、ボチもよく三郎に懐いて、三郎を見る



と、いつも尾を振つて嬉しそうについて來ます、學校へ行くときはきつと門のそばまで送つて行き、歸校の時間になると、また門のそばまで迎に行きます、所がある冬のここでした。

三郎の家は、草深い田舎にありました、此の近所は中々寒いところで、冬になると雪が澤山降りました、

ある日のことで、二三日降り續いた雪が、今日もまだ止まなないで、もう一尺も積りました、近所の子供はみんな學校を休みましたが、三郎は勉強すきの子供ですから、お父さんやお母さんの留めるのも訊かずに學校へ行





可愛い小犬が
飛んで来て
裾をくわいて
泣いてゐる
父さん後から
ついて来て
雪を掘つたら
大事な子

賢い小犬

童話

正男作



賢い小犬

きました。

午後になつても中々雪は止みません、いつも三郎が歸る時刻になつても、中々歸つて来ません、ポチはいつもの通り迎ひに行きましたが、すぐに歸つて来ましたが、見るとお父さんはびつくりしました、三郎は来ません、ポチが一疋でかへつて来たのです、

『これ／＼ポチ、お前の主人はどうかしたのか。』

ポチは唯高く吠えるばかりです、ろしてお父さんの着物の裾をくはへて頻りと戸外の方へ引張つて行かうとしてゐます、



賢い小犬

きました。

午後になつても中々雪は止みません、いつも三郎が歸る時刻になつても、中々歸つて来ません、ポチはいつもの通り迎ひに行きましたが、すぐに歸つて来ました、見るとお父さんはびつくりしました、三郎は来ません、ポチが一疋でかへつて来たのです、

『これ／＼ポチ、お前の主人はどうかしたのか。』

ポチは唯高く吠えるばかりです、ろしてお父さんの着物の裾をくはへて頻りと戸外の方へ引張つて行かうとしてゐます、

童 話

賢い小犬

正男作

可愛い小犬が
飛んで来て
裾をくわいて
泣いてゐる
父さん後から
ついて来て
雪を掘つたら
大事な子



『どうしたのだ、これボチ。』

ボチは啼ないてゐます、然しかし何なんのことかお父とうさんには分わかりません、ボチはますます大おほ聲こゑで吠ほえます、

『あなた、三ち郎ろうに何なにか變かはつたことがあつたのでは無ないでせうか。』

と、お母かあさんがお父とうさんに言いひますと、ボチはお母かあさんの顔かほを見て、点あて頭んぐをするやうに吠ほえました、

『あ、左ひだり様さまだ、こりや斯かうしちやあられない。』

お父とうさんも氣きがつかまりました、ろして雪ゆき装しやうぞく束たすをしますとボチは嬉うれしそうに吠ほえました、そしてお父とうさんの着き物ものの

賢さとしい小こ犬いぬ



裾をくはへて、戸外へ引張り出しました、そして、ズン
く先に立つて飛び出しました。

『ポチや、何所だ、三郎は何所にあるのだい。』

と、言ひながらお父さんもポチのあとに續いて飛び出
しました、學校と家の中ほど位にある林のそばに來ます
と、ポチは立ち留つて、前足で雪を搔きながらワンク
吠えました。

『此所か、此所に三郎があるのか。』

と言ひながらお父さんは持つて來た雪かきで雪を除け
て見ますと、三郎が凍え死んだやうになつてゐました。



やつと堀り出して家へかへつて焚火で暖かにしてやるこ
間もなく丈夫の身體になりました、その後三郎とポチは
ますく仲がよく成りました。

五大膽な娘

北アメリカの、大きな町の傍を流れる河に鐵橋が掛つ
てゐます、この鐵橋から餘り遠くない所に、ケートと云
ふ娘が、お父さんと二人で寂しく暮してゐました、お父
さんは町の鐵工場の職工の頭をしてゐました、毎日々々
ケートは家にゐて、御飯ごしらへをしたり、編物をした



りして、淋しく留守居をしてゐました。

ある晩、それは暴風雨のひどい晩でした、いつものやうにケートはお父さんの歸途を待つてゐました、お父さんは中々歸て來ません、

『お父様はどうしたのだらう、こんなに遅くなつたのにどうして御歸りなさらぬのだらう、もしや大水で橋が流れたのぢや無いかしら。』

と案じながら、窓から外を眺めて居りました、

雨はパラ／＼と降つてゐます、風は烈しく戸や障子をゆすります、四方は眞暗です、ケートは寂しくつて仕方



がありません、早く御父さんが歸りそうなものだと思つて待つてゐました、雨はますます烈しく降り、風はますます強く吹いてゐます、その時轟々と云ふ音がして來ました、

『たや汽車が來るわ。』

と言つて、ケートは鐵橋の方を見ました、闇の晩ですから、機關車の前の火光が見えるだけです、

するど、如何でせう、大きな音がしました、みりくと言ふ凄じい音が鐵橋の方でしました、それと同時に、機關車の火光が消えて終ひました、



『おやく、如何したのだらう。』

と、見てみると、それつきり汽車の走る音がしません時刻を考へて見ると、それは丁度貨物列車の通る時間です、けれども、急に大きな音がして、火光が消えてしまつたのは奇怪しい、それつきり走る音が聞えないのは奇怪しい、

『何か變つたことがあつたのぢやないかしら。』

と、ケートは偶然思ひつきました、

そこで提灯をつけて河岸へとんで行つて見ました、するご大變です、橋はありません、あの丈夫な鐵橋が影も



形もありません、

『大變だわ、どうしたのだらう。』

と、考へて見ますと、すぐに分りました、それは毎日々々の水大で、鐵橋が崩壊れかゝつてゐたところへ、進行して來た汽車の重みで、急に落ちてしまつたのです、橋が落ちたから堪りません、瀛車も一所に川の中へ落ちて、大水のためにおし流されてしまつたのです、だから、あんな大きな音がして、火光が消えてしまつたのです、

『まあ大變なことだつたわ、今のか貨物列車だからいゝ』



やうなもの……人が乗つてゐたら大變……』

ご思ひました、さう言へばもうあとの流車が来る時間です、橋が落ちてゐることを知らないで来れば、この闇の晩だから分りはしない、さうすれば今の貨物列車と同じやうに、川へ落ちて、橋し流されてしまふかも知れない……』

『大變だ、どうしても助けてやらなくつちやならぬい。』

と、ケートは家へも歸らず、其の儘停車場の方へ飛んで行きました。



此の鐵橋から停車場までは、一里ばかりあります、さうして林を通り、森を越えて行くので、餘り良い道ではありません、晝でさへも寂しい所ですが、そんなことを考へてはゐられません、ケートは一生懸命です、

途中で提灯も吹き消されてしまひました、持つてゐた傘も破れてしまひました、身體中はびしょ濡れです、着物も破れ、手足には擦り傷も出来ました、然しケートは一生懸命です、

一生懸命のケートが、やうやく停車場へ着いたときに流車は黒煙を吐いて、汽笛を鳴らして、今や發車しやう



とする所でした、出てしまへばもう如何することも出来ません、ケートは疲れてしまつて聲が出ません、『汽車を出しては不可せん、不可せん。』と、言つたつもりですが、他の人には何のことか分りません、列車は正に出やうとします、仕方ありませんから、ケートは突然瀧車の前へとび込んで、『不可せんく。』

と言つた儘倒れてしまひました、何事が起つたのかしらと、停車場の驛長は驚いて駆けつけました、他の驛員もとんで來ました、瀧車は自然と



留まりました、
『ごうしましたく。』
と、みんなケートに訊きました、
『瀧車を出しては不可せん、鐵橋が……鐵橋が落ち……。』
と言つた儘、ケートは聲が立てられませんでした、然し、間もなく皆の介抱で息を吹きかへしました、その時はもう、次の停車場へも電話をかけて、瀧車の出るのを留めてありました、警察官や驛員が鐵橋の落ちたのを調べて來ました、ケートの勇しい行爲のために、幾千

人と云ふ瀛車の乗客の危ふい生命が助かりました、みんなの喜びは言ふ迄もありません、人の生命を助けたケートも本當に嬉しいと思ひました、やがてケートは大勢の人に送られて家へ歸りました、お父様も喜びました。

六 秘 密 の 使

勇しい支那の少年の話をしませう、
 今から二十年ばかり前のことです、支那に拳匪といふ土人が、大勢寄り集つて亂暴を働いたことがあります、土人とは言ひながら一萬も二萬の大勢で、中には支那の



役人や軍人も交つてゐるのですから、大した勢で、支那の都の北京は丸で戦場のやうになりました、

その時、ある支那人の商店にゐた一人の小僧がいましたが、夜になると英吉利人の拵へた學校へ通つて勉強してゐたので、ひどく拳匪から憎まれ、商店から追ひ出され、一時は拳匪のために殺されやうございましたのを、その英吉利人に助けられて、英國の公使館の給仕になりました、然し、間もなく拳匪は英國の公使館へ押しよせて来て、十重二十重に、とり圍んで攻撃をはじめました、



公使館には軍人があませんから、戦をするのに骨が折れます、そこでいろいろ相談しましたが、

『天津には兵隊が来てゐるのだから、そこへ此方の様子を知らして、兵隊をすこし分けて貰はふ。』

と云ふことに決つて、夜になつてから使を天津へ送りましたが、とうとう歸つて来ません、途中で殺されてしまつたのです、それからも二三度使を出しましたが、何れも、天津まで行かないうちに拳匪に捕まつて殺されてしまひます。

それからは、誰も行かうと云ふものはありません、た



金を澤山にやるからと言つても誰あつて行かうと言ふものはありません、

『もう仕方がない、如何したらいいか分らない。』

と、公使館の人々も諦めて、運を天に任せることにして、元氣もなく戦をしてゐました、すると、

『私が密使に参りませう。』

と言ひ出したものがあります、

それは、他でもない彼の支那の少年です、自分が殺されやうとしたときに生命を助けられたその恩返しをしやうと決心したのです、みんな驚きました、





ぼろ着て
襦もつて
トボく歩く
乞食の子
小さい紙片
かいくして
時々四邊を
キヨロキヨロ

秘密な使

正男作



秘密な使

「お前が行くか。」

公使館の役人たちも、行つて貰いたいのには山々ですが、然し、大人でさへも行り損つた使者の役目が、この少年に出来るかどうか危ないと思ひました。

「私がゆきませう、私は少年ですから拳匪も安心して通すかも知れません。」

「それも左様だ。」

「それに、私は支那人ですから、尙更安心して、油断してゐるかも知れません。」

「ちや御苦勞でもひとつ頼まう。」

童話



秘密な使

『お前が行くか。』

公使館の役人たちも、行つて貰いたいのには山々ですが然し、大人でさへも行き損つた使者の役目が、この少年に出来るかどうか危ないと思ひました、

『私がゆきませう、私は少年ですから拳匪も安心して通すかも知れません。』

『それも左様だ。』

『それに、私は支那人ですから、尙更安心して、油断してゐるかも知れません。』

『ちや御苦勞でもひとつ頼まう。』

童話

秘密な使

正男作

ぼろ着て
襦もつて
トボく歩く
乞食の子
小さい紙片
かしくして
時々四邊を
キヨロキヨロ



と、公使館の役人も、ほかにいゝ方法もないので、い
よいよ此の少年を使者にやることにしました。

時しも眞夏、暑い盛りの七月四日の夜明け方、少年は
胴のまわりを太い縄で縛つて貫つて、四十丈もある煉瓦
の壁のそとへ釣り下げられました、幸に誰にも見つか
りませんでした、北京から天津まで四十里ばかりあるの
ですから、いつ何所で見つかるか分かりません、思へば危
ない仕事なのです。

汚い着物を着て、丸で乞食のやうな装をして秘密の書
付を小さくたゝんで桐油紙に包み、これを缺けた鉢の底

へ入れて、その上にはお粥を盛つて置きましたが、誰が見ても、この鐵鉢の中に秘密の書付があらうとは思はれません、然し、運の悪いことには、四十丈もある煉瓦の壁から下りた拍子にこの鉢を石の上に落して、破壊してまひました。

『是りや大變だ、どうしやう。』

ご、いろいろ考へましたが、根が伶俐な少年ですからその書付を出して、桐油紙を破り、着物の裾を裂いて、その巾の中へ書付をいれて指をぐるぐる巻き、丸で怪我でもしてゐるやうに見せて出かけました。



五六間も行つたかと思ふと、すぐに拳匪に見咎められました、厳しく身體を調べられました、何にも怪しいものを持つてゐなかつたので、本當に乞食の子供だらうと思つたものか、すぐに許してくれました、然し、手に巻きつけてゐるのは、何だか見付りそうですからこんどは着物の裾へ縫ひ込みました。

長い間ですから食物がなくて因つたり、泊るころがなかつたりして困りました、ある日一軒の農家へ泊りましたが、此所の主人は親切らしく、

『乞食なんかするより、おれの所に奉公してゐろ。』

と云ふのです、自分で無理にとめてくれと言つたので
すから、厭だこ云ふ譯にも行かないで大變困りました、
仕方がありませんから一度承諾してたいて、一週間ばか
り経つと、病氣だと言つて、ウンウン唸り、今にも死に
そうに見せました、

「此所で死なれちや厄介だ。」

と、言つて追ひ出しました、少年は困つたやうな顔をし
て、よろよろ歩いて出ましたが、その家も見えなくなる
と飛ぶやうに走りました、

さまざまの苦勞を重ねて、やうやく天津に着き、英國



の兵營を訪ねて秘密の書付を、大將に渡したのは七月の
二十二日でした、天津の領事も、兵隊の大將も、みんな
この少年の勇しい行爲に感心しました、

「すぐ兵士を送る、安心せよ。」

こ云ふ返事を受けとつて、すぐに元來た道を引きかへ
しました、道々、やつぱり拳匪に咎められました、う
まく言ひぬけて、七月二十八日に北京へ歸りました、
無事に北京へ歸つて、公使館の前まで來ましたが、何
しろ四十丈もある煉瓦の塀ですから、中々上ることは出
來ません、丸で屏風を立てたやうですから、捕まりどこ



もありません。

『夜のあけないうちに入りたいたいものだ。』

と、いろいろ考へた末、かべの下、せまい流しの口を潜つて中へ入りました。返事の書付を公使館の人々に渡しますと、丸で死んだものが蘇生つたやうな喜びです。此の少年は皆々からその勇しさを褒められ、その苦心の話を訊かれました。然し、少年は少しも自慢するやうな風もなくよく働いてゐました。

八月の十四日に天津から兵隊が来て、拳匪はみんな追ひ拂はれました。公使館の人々は無事に助かりました。



それと云ふのも、みんな此の少年のおかげだと云ふのでいろいろの品物を送つてその功勞を褒めました。

七九死一生

英國にセントレオナードと云ふ有名な寺があります。この寺に高い塔がありました。むやみに人の登らぬやうに、その階梯は引きあげてありましたが、入口の戸はいつも開放してありました。

ジョンと、ジエーは、毎日此の塔のそばへ来て遊んでゐる仲のよい子供でした。はじめは塔の傍で遊んでゐた





のですが、しまひにはとう／＼塔の中へ入つて遊ぶやうになりました、塔の中は、中々拵方が混み入つてゐて、何千本と云ふ太い柱の間に、數限りもない貫木が架け渡してありました、

『ジエー君、上つて見やうぢやないか。』

と、ジョンは言ひました、

『だつて梯がないもの上れやしないよ。』

ジエーも上りたいには上りたかつたが、梯が無けりや上れないと思つてましたから、さう言つて塔の上を見てゐました、その内にジョンは、貫木にとりつき、梁に傳



はつてズン／＼上つて行きました、

『梯なんか無くつても上れるよ、登り給へ登り給へ、構やアしないよ。』

と、上から聲をかけるのでジエーも羨ましく成つて、負けない氣を出し、

『待ち給へ、僕も上るから。』

と、ジエーも同じやうに上りはじめました、互に競争のやうに上りました、見る／＼うちに五六丈の高い所へ上りました、二人はいゝ心持になつて下を見て、

『高いねえ君。』

『愉快だね。』

と言つてゐました、

すると、此所にかけてある一本のけた木が、何時の間に腐つてゐたものと見ぬて、二人がいつしよに足をかけるや否や、その重みで真中からめりくと折れておちかゝりました、此の時ジエーは、早くも上にあつた横木に手をかけましたが、ジオンはその機を外して、折れたけた木こそ一所にずる／＼と落ちやうとしましたが、急にジエーの足に取りついておちることだけは免かれましたが、然し、危険千萬なことです、



横木につる下つてゐるジエーの足に、もう一人ジオンが吊がつてゐるのですから、危険なことは言葉では言へないほどです、下は五六丈もあります、おまけに下には石が敷いてあります、

『助けて呉れ〜。』

『誰か来てくれ。』

と、泣き叫びましたが、人家から遠い寺のことですから、誰あつてこれを聞きつけて来る者はありません、ごかくするうちにジエーは自分の足にジオンがつるさがつてゐるので、手足がしびれて来て、今にも千切そうにな



つて来ました、ジエーの涙がジヨンの顔にはろく／＼かゝります、

「ジヨン君、僕の腕はぬけそうだよ、もう迎も駄目だよ君も覺悟し給へ。」

「然し、ジエー君、僕が手を放せば君だけは助かるかも知れないよ。」

「僕だけなら、助かるだらうけれども、駄目だよ、もう……。」

「ちや僕、手をはなすから君は助かつてくれ給へ。」

「駄目だよ、死ぬなら僕も一所だよ。」



「いや、二人死んでも詰まらないから、せめて君だけ……。」

「いや、一所だく、死ぬなら一所におちて死なう。」

「僕が悪いんだから、僕が上りさへしなればこんなことには成らないんだから。」

と、ジヨンはほろ／＼泣いてゐます、ジエーも涙を流して、

「然し、僕がとめればよかつたのだ、一所になつて上つたから悪いのだ。」

「二人とも悪いのだから、二人で死なうよ。」



『二人とも死んぢや詰らないから………ぢや左様なら
………』

と、ジョンは手を放しました、五六丈も下へ………ジ
エーは目が眩りそうでした、たゞ無やみに横木につかま
つてる丈で、手も足も覚えはありません、

思ひ切つておちたジョンは、不思議と敷石の隅の、草
の柔かく生てるところへたぢました、一時氣絶はしまし
たが、二時間ばかり経つて蘇生りました、うへを見ると
ジエーが横木につかまつて、青くなつてつる下つてゐま
す、ジョンは大いそぎで村の人を呼んで來ました、村の



人が駈けつけてジエーを下したときに、ジエーはもう正
体はありませんでした、けれども手當の甲斐があつて、
やがて丈夫になりました、

九死一生といふ場合に、お互に助け合つたこの二人の
少年の心持を、神様も感心に思つたのでせう、二人とも
不思議に生命を助かつたのです。

八 泥 棒 釣 り

ある晩のことでした、一郎さんと二郎さんは火鉢の前
に座つてお父様の昔噺を訊いてゐました、一体お父様は





泥棒釣り

永い間探偵の役をつとめてゐましたので、いろいろ面白
い話を澤山知つてゐました、

そこで、今晚も例のやうにお話を訊いてゐると、お座
敷の方でコトくと云ふ音がして、ピリ／＼障子の紙を
破るやうな音がしました、一郎さんは變に思つて、

「お父さん、お座敷の方で音がしますよ、ホラ……。」
と、氣味悪そうにお父さんの側へ寄りますと、二郎さ
んも、

「本當に何でせう、僕、行つて見て來ませうか。」
と言ひました、するとお父さんは、ちよつと考へてゐ



重 謠

泥棒釣り

正男作

家の父さん
智恵出して
泥棒話をして
居ると
本當の泥棒が
足出した
障子破つて
尻出した



泥棒釣り

永い間探偵の役をつとめておりましたので、いろく面白
い話を澤山知つておりました、

そこで、今晚も例のやうにお話を訊いてみると、お座
敷の方でコトくと云ふ音がして、ピリりと障子の紙を
破るやうな音がしました、一郎さんは變に思つて、

「お父さん、お座敷の方で音がしますよ、ホラ……」
と、氣味悪そうにお父さんの側へ寄り来ますと、一見さ
んも、

「本當に何でせう、僕、行つて見て來ませうか。」
と言ひました、するとお父さんは、ちよつと考へてゐ



童話

泥棒釣り

正男作

家の父さん
智恵出して
泥棒話を
して居ると
本當の泥棒が
足出した
障子破つて
尻出した



ましたが、

「いや／＼行つて見なくもいゝよ、大方鼠だらう、鼠ならあとでわし退治してやるから心配しなくもいゝよ、斯うつと、何所まで話したつけな、さう／＼大泥棒になれる法だつたな。」

「いゝえお父様ちがひますよ。」

「鬼退治のお話ですよ。」

「まあ／＼いいよ、何でもいゝから黙つて訊いておいでこれ／＼そんな顔をしないで大泥棒になれる話を御訊きよ。」

お父さんはさう言つて、急に外の話をはじめました、
今まで鬼退治の話をしてゐたのが、大泥棒になる話と變
つたのですから、一郎さんも二郎さんもびつくりして目
を丸くしてゐます、

お父さんは、何故こんな話をしたかと言ひますと、先
刻音がしたときに、お父さんは大低今の音が頭の黒い泥
棒鼠だと言ふことをちやんご知つてゐましたから、これ
をつかまへやうと思つたのです、しかし、それを一郎さ
んや二郎さんに言ふと怖がつて騒ぎ出すと不可なと思
つて、こんな話をはじめたのです、



『そこでね、一郎も二郎も、わしがお話をしまふまでは
どんな事があつても、どんなものを見ても、決して騒い
ではいけないよ。』

『えゝ。』
と、一郎二郎も點頭きました、そこで御父様は話をは
じめました、

『わしもなア、長い間探偵をしてゐたから、いろいろな
豪い泥棒にあつて、いろいろ上手に泥棒をする法を教へ
て貰つたから、今晚はその話をしやう、と云ふのは、大
泥棒になるには、おまじないがある、そのおまじないを



すると、誰が見てゐても、どんなに人が澤山ゐても、決して人に見つけられないと云ふ、それはく、面白いことだ。

と、お父さんはエヘンと咳ばらひをして又言葉を次ぎました、

『その何だ、まづ泥棒に入つたら、障子に穴をあけて、舌を、ペロリと出すのだ、まあ、こんな風にするのだよ。』

と、お父様は舌を出して見せました、するとた座敷の障子に穴をあけてペロリと舌を出すものがありました、



お父様は笑ひながら、

『それで、舌を出したらこんどは帯を解いてその穴から座敷の中へ投げ込まなくつちや不可い。』

と言ふと、こんどはその障子の穴から帯を投げ込みました、

一郎も二郎も、不思議なことだと思ひましたが、お父様が黙つてゐると言ひましたのですから、黙つて見てゐました、お父さんはまた、

『その次には着物を脱いで投げ込まなくつちや駄目だ。』と、言つたかと思ふと、障子の穴からめりく、着物



が入つて來ました、お父さんは眞面目な顔をして、
『今度は足袋と禪をとつてその穴からなげ込め。』
と言ひますと、やつぱりお父様の言ふ通り、禪と足袋
が入りました、

『さて、そこでいよいよ裸體になつたが、こんどは自分
の身體の入る位に障子の骨を折るのだ、斯うなりやもう
どんな音がしても人には聞えないし見えないのだ。』
と、云ふと、障子の穴が大きくなりました、

『これからいよいよ大變だ、今度は足の方から先にその
あなから入るのだ、まづお臍のところ位まで座敷へ入れ



るのだ、さうすりやもうべたものだ。』

と言つてるうちに、毛もくちやらの足が、ニヨキく
とあなから出ました、お父様は急に笑ひ出して、

『は、は、は、馬鹿泥棒。』

と、大聲で怒鳴りました、ウマくとお父様に欺され
た泥棒は、びつくりして逃げやうと思ひましたが、中々
逃げられません、

『それ、一郎も二郎も早く泥棒を捕へなさい。』
と、言ひました、

一郎と二郎は喜んで、ばたくと飛んで行つて、泥棒





の足をつかまへました。泥棒はもう如何することも出来ません、二人は繩をもつて来て足を縛つてしまひました。

「さあ泥棒、お父様はゑらからう。」

「やい、馬鹿泥棒降参したか。」

と、おさへつけますと、泥棒はぶるくふるえながら、

「御免なさい〜。」

と、泣き出しました。



九兄妹喧嘩

利夫とお駒は三つちがひの兄妹ですが、どう云ふものか、兄妹仲が悪くつて仕方がありません、寄るとさわる喧嘩ばかりしてゐます、丸で犬と猿のやうですから、近所の人も、しまひには本當の名を言ふものはありません。

「犬さん。」

「た猿さん。」

と、かげ口を訊くやうになりました。

お母さんも、お父さんも、大層これを心配して、いろいろ言つて訊かせますがどうしてもなほりません、利夫はお駒を打つたり叩いたりします、お駒はまた、兄さんの言ふことをちつとも訊かないで、口答ばかりしてゐました。

所が、此の近所にゐらい御醫者が近頃來ました、その人は大學を卒業した立派な先生で、どんな病氣でも全快しないと云ふことはありません、中々評判のいい人でした、ある日お駒はこの先生の所へ参りました。

「何か用かね、お薬かい。」



髯の生えた先生は斯う言つて訊きました、お駒は、「あのねえ先生、あたしの兄さんはそれはく意地が悪くつて、あたしを打つたり叩いたりする人ですけれども全快る薬はありませんか。」

「何だ、意地悪のなほる薬？ は、あおかしなものか欲しいのだね。」

「だつて、あたしもう我慢が出来ないんですもの、本當に意地の悪い兄さんつたらありやしない、あたしは何か言ふと、すぐに打つたり蹴つたりするんですもの、口惜しくつて口惜しくつて仕方がないけれども、兄さんは男

だし、それに力がありますからあたし、いつも負けつちまふの。」

「あ、よろしい、もう分つたよ。」

と、醫者はわ駒が尙は言はふとするのを止めて、

「それではね、私がよい薬をあげる。」

「あのお薬を下さるの。」

「あげるよ、すこしお待ち。」

と、醫者は薬室へ入つて、大きな硝子の瓶をもつて來ました、その瓶の中には透き通つた薬が入つてゐました。



「この薬をあげるからね、兄さんが何か言つても、お前は決してものを言つては不可ないよ。」

「あら、あたしが呑むの。」

「さう、お前が呑むのだよ、そしてね、兄さんが何か言つたら此の薬を口にふくんでゐるのだ、兄さんが機嫌のなほる迄は、吐き出したり、飲みこんだりしては不可ないよ。」

「ふくみ薬ね。」

「あ、左様だ、口にふくんでゐて決して吐き出してもいけないし、飲み込んでもいけないよ、兄さんが黙つて





しまつたら飲んでもよろしい。』

と、念を押して薬を渡しました、

た駒はこの薬を貰つて、喜んで家へ歸りました、歸るともう利夫はブイ／＼怒つてゐます、

『こら、お駒何所へ行つて遊んで来たのだ、不可いぞ。』

この時だと思つて、お駒は今醫者から貰つて来た薬を出して、そつと口にふくみました、それを見て利夫はいよく怒つて、打つたり蹴つたりしましたが、た駒は黙つて返事もしないでゐました、その内に利夫は、いつくらた駒を窘めても、お駒が口答へもしないし、手出しも



しないので、

『こいつ如何かしやがつたな。』

と、變に思ひましたが、張合が抜けてとう／＼手を引きましたから、お駒は始めて薬を飲み込みました、こうしてお駒は、毎日々々た醫者から薬を貰つて来ては、利夫が何か言つて喧嘩をしかけるこ、いそいでその薬を口にふくんで利夫が何を言つても、打つても、叩いても、けつても、ちつと我慢してゐました、毎日々々、た駒が口答へをしませんから張合がぬけました、相手のない喧嘩は出来ない道理で、しまひには餘り苛責めないやうに



兄妹喧嘩

成りました、

ですから、お駒も兄さん〜と言つて、懐くやうになり、利夫もお駒々々といつて可愛がるやうになりました。二人の兄妹が丸で生れ變つたやうに仲がよくなつたものですから、お父さんも、お母さんも、大層よろこびました。

『どうだ、薬は利いたかな。』

と、ある日醫者が来て訊きました。

お駒は、自分がお醫者の所へ薬を貰ひに行つたのが恥かしくなりました。そこでお母さんは、お醫者からいろ



童話

兄妹喧嘩

正男作

朝から晩まで
喧嘩して
笑つた事のない娘
不思議な薬を
口に入れ
何を聞いても
笑つてる



兄妹喧嘩

成りました、

ですから、お駒も兄さん〜と言つて、懐くやうになり、利夫もお駒々々といつて可愛がるやうになりました。二人の兄妹が丸で生れ變つたやうに仲がよくなつたものですから、お父さんも、お母さんも、大層よろこびました、

『どうだ、薬は利いたかな。』

と、ある日醫者が来て訊きました、

お駒は、自分がお醫者の所へ薬を貰ひに行つたのが恥かしくなりました、そこでお母さんは、お醫者からいろ

童話

兄妹喧嘩

正男作

朝から晩まで
喧嘩して
笑つた事のない娘
不思議な薬を
口に入れ
何を聞いても
笑つてる



くお話をきいて、大層御禮を言ひました、
もとく喧嘩ご云ふものは、一方が無理を言ふと、一
方がこれにさからつて、口答をするから、先方の機嫌を
悪くして、喧嘩の花が咲いて来るのですか、一方が何を
言つても、一方が負けてゐさへすれば決して喧嘩は出来
はしません、お醫者は、利夫の賣り言葉に、お駒の買言
葉から喧嘩が出来るのだと云ふことを悟りましたから、
さう云ふときに、お駒が黙つてつさへあれば喧嘩は起らな
い、然し、口で言つて教へたのでは中々全快はしません
から、自然と口を訊くことの出来ないやうに、水を薬だ

と云て呉れたのです、そのことを醫者が話して訊かせたので、利夫もお駒も恥かしくなりました、しかし二人はそれつきり喧嘩などはしない仲のいい、兄妹になりましたとさ。

一〇 料理の匂ひ

虎吉は、お母さんのお使ひに深川の伯母さんの家へ行きました、伯母さんは御小使だといつて一錢の銅貨を三個呉れました、

『参錢ぢや、何を買はふかなア、活動へも割引にならな



きあ入れないし、お伽文庫は買へないし、しやぶり玉でも買ふかな、しかし、しやぶり玉もなめつちまやア終えてしまふんだから詰らない、もう二錢ありやキヤラメルが買へるかなア。』

と、その三錢を片方の手にしつかり握つて家の方へ歩つて來ました、

『もう一錢ありや一錢蒸汽に乗れるから淺草へ行つて、活動の看板だけでも見て來るんだけども、三錢ぢや仕方がないや。』

と、獨り語を言ひながら來ると、何所からともなく、



旨味あじ そうな匂におひがブン／＼して來きます、

『やア、天てん麩ぶ羅ら屋やだなア、いい匂におひだなア、三さん錢せんぢやと
ても天てん麩ぶ羅らは食くへないや、精しやう進じん揚あひ位くらなもんだ。』

と、言いひながら立たち留とまつて天てん麩ぶ羅らの匂におをかいでまし
た、

大おほきな天てん麩ぶ羅ら屋やで、往かう來らいにむかつた料りやう理り場ばで、どん
／＼天てんぶ羅らをこしらへてます、虎こ吉きちはそれを立たつて見み
てましました、ブン／＼い、匂におひがする、夕ゆふ方かたではあるし
お使つかひで一しやう生けん命めい歩あるつたので、少せうしお腹なかが空へつて來きました
から、そのてんぶらの匂におひが、たまらなく腹はらの中なかへ泌しみ



渡わたります、すると、

『やい、この小こ僧そう何なにをしてやアがるんだ、唯ただぢや濟たねえ
ぞ。』

と、てんぶら屋やの若わかい者ものが出て來きました、虎こ吉きちはびつ
くりして、

『何なんだい、小こ父ちやうさん。』

『何なんだぢや無なえや、先まづ刻ときから店みせの前まへへ立たつて何なにをしてや
アがるんだ。』

『何なにをしてるつて、僕ぼく、てんぶらなんか取とりやしない
よ。』





料理の匂ひ

「取らねえ、さ、取らねえたつて先刻から匂を嗅いでるぢやねえか。」

「ああ、ろりや匂は嗅いでゐたけれども……。」

「匂を嗅いだら嗅賃を置いて行け、手前に嗅がせるつて拵らつてゐるてんぶらぢや無いぞ。」

「匂を嗅いで、お金を取るなんて、そんな事があるもんか。」

「そんなことも斯なこともあるもんか、さあ置いて行けてんぶら屋の店頭に立つたり、匂を嗅いだりすりや、料理代の半分位置いて行くのは普通だぞ。」



「そんな事があるもんか。」

「ぢや何故そこに立つて匂を嗅いでゐたんだ。」

「匂を嗅いだつて、それで金を出すなんて、そんな事があるもんか、そんな滅茶苦茶な理屈があるもんか。」

「此の小僧生意氣な野郎だ。」

と、言つてる所へ、丁度巡廻中の巡査がまわつて來ました、

「こらく、何をしちよるか。」

と、髯をひねり〜訊きます、

「旦那、訊いとんくんない、この小僧は先刻から家の店

料理の匂ひ



頭へ来ててんぶらの匂を嗅いでるんです、ですから、あつしが唯ちや濟まねえ、いくらか嗅ぎ賃を置いて行けつて、申してゐるんです。』

と、てんぶら屋の若い者が、言ひますと、虎吉も負けではあません、

『食べもしないで、お金を出すなんて、そんな理屈はありませんや、ねえ巡査さん、匂を嗅いだ位でお金を出してたつまり小法師があるもんですか。』

と、言ひます、兩方の言ふことを、だまつてきいてゐた巡査は、そのひげをひねりく考へてゐましたが、



『さうか、よし／＼乃公が裁判してやらう、これ小僧お前、錢を持つちよるか。』

『え、僕三錢持ってます、伯母さんから貰つて來たのです。』

『よし／＼、それではそれを兩方の掌へ乗せろ。』
『斯うですか。』

と、虎吉は三錢の銅貨を兩手へ戴せました、

『よし／＼、その兩手を合せてがちやく振れ。』
『はい。』

虎吉は巡査に言はれた通り、銅貨をかちやく振りま

料理の匂ひ

した、がちやく騒々しい、音がしました、巡査は笑つて、

「さあ、それでよい、てんぶらの匂を嗅いだのだがら、金の音をきかせてやればそれで代を拂つた様なものぢやは、、、。」

一一 優曇華の花

夕立の雨が止むと、お月様が庭の隅の松の木の蔭から上りました、風がそよよと涼しく吹いて來ます、お月様の影のさすお椽側でお池の鯉を眺めながらお鶴と正



雄は話をしてゐました、すると、何所からともなく蝶々に似て綺麗な虫が一匹、水色のやうな羽を動しながら飛んで來てランプの玉笠にとまりました、

「姉さん御覽よ、あんな綺麗な蝶々が來ましたよ。」

「これ、蝶々ぢや無いわよ、これね、白露虫つて言ふのよ。」

「白露虫つて何？」

「白露虫つてね、蝶々のやうだけれども蝶々ぢや無いのよ、ホラ、こんな羽が薄くつて少し青いだらう、蝶々ならばね、羽をチャンと揃えて立つてるんだけれどもね、



白露蟲は、羽を立て、ゐないんだつて、ほら羽が立つちやゐないだらう。』

『さうね、僕、捕へてやらうや。』

『いけ無いよ、可哀想にすぐ死んでしまふわよ、この虫はね大變壽命が短かくつて、さうして大變弱いんですつて、いつか兄様が仰有つたわ。』

『壽命つて何？。』

『生命のことよ、長く生きられないのよ。』

『此の蝶々がかい。』

『蝶々ぢやないわよ、白露蟲つて言ふのよ。』



『だつて僕蝶々だと思ふんだもの。』
『正雄さん強情ね、ぢやね、明日學校へ行つてきいて御覽なさいよ。』

『あゝ、僕、先生にきいて見るよ、白露蟲なんてあるもんか、僕、きつと勝つと思ふな。』

『ほゝゝゝ、正雄さんが勝つたら、あたし何でも好きなものをあげるわ。』

『本當？。』

『本當よ、その代りお前負けたら、姉さんの言ふことは何でもきかなくつちやいけませんよ、ああ、何だか寒く



なつて来た。』

と、言つてお鶴は寒さうに身ぶるひしました、それを
お母さんがきいて、

『鶴や、お前風邪を引くと不可ませんよ、正雄も此方へ
来て、二人ともお休み。』

と云つて呼びました、

二人ともその晩は、その儘寝てしまひました、所が、
その翌日、お鶴はとうとう風邪を引いたものと見えて、
少々熱があり御飯も食はずに寝てしまりました、

けれど、正雄は白露虫のこころが氣になつて仕方があり



ませんので御飯を食へるとすぐに學校へ行きました、そ
して先生に昨夜の御話をしました、すると、先生はいろ
く白露虫のことを話してくれました、正雄はとうとう
負けになつたのです、けれど、正雄は先生からくわしい
お話をきいたので、今度はひとつ姉さんに自慢をしてや
らうと思つて、學校が御仕舞になるのを待ちかねて、大
いそぎで家へ歸つて來ましたところ、どうしたのか、
お母さんも姉さんも泣いてゐました、
『母さん、どうしたの、姉さん何故泣くの。』
と、正雄は不審に思つてき、ました、





電氣の笠に
花咲いた
優曇華の花が
ひいらいた
青玉の花が
鈴なりで
羽根が生いて
飛んで行く

優曇華の花

正男作



優曇華の花

だんぐ様子^{やうす}をきいて見ると、今朝お母^{はは}さんが、ランプを掃除^{そうじ}しやうと思^{おも}つて見たら、笠^{かさ}に優曇華^{うとうんげ}が咲^さいてゐたのださうです、此^この優曇華^{うとうんげ}が咲くと、きつとその家^{うち}に悪い^{わる}ところがあると云^いひ傳^{つた}えてありますから、姉^{ねえ}さんの病^{びやう}氣^きも、大方^{おほかた}その所爲^{せゐ}だらうから、どうしても癒^{なほ}るまいと云^いつて二人^{ふたり}して泣^ないてゐたのです、

『何^{なん}んだ、詰^{つま}らない。』

と云^いつて、正雄^{まさお}はそのランプの所^{ところ}へ行^いつて見ると、昨夜^{さよふ}まで塵^{ちり}一片^{ひとつ}ついてゐなかつたランプの笠^{かさ}に、一寸^{すん}ばかりの細^{ほそ}い絹糸^{きぬいと}のやうなものが、みんなで十本^{じゅっほん}ばかり芒^{すすき}の



電氣の笠に
花咲いた
優曇華の花が
ひーらいた
青玉の花が
鈴なりで
羽根が生いて
飛んで行く

童 話
優曇華の花

正男作



優曇華の花

だん／＼様子をきいて見ると、今朝お母さんが、ランプを掃除しやうと思つて見たら、笠に優曇華が咲いてゐたのださうです、此の優曇華が咲くと、きつとその家に悪いところがあると云ひ傳えてありますから、姉さんの病氣も、大方その所爲だらうから、どうしても癒るまいと云つて二人して泣いてゐたのです。

『何んだ、詰らない。』

と云つて、正雄はそのランプの所へ行つて見ると、昨夜まで塵一片ついてゐなかつたランプの笠に、一寸ばかりの細い絹糸のやうなものが、みんなで十本ばかり芒の



やうに立つてゐます、うの糸の先には小さい青玉がついてゐて、中々綺麗です、よく氣をつけて見るこ、その優曇華のはゐてゐる所は、昨夜白露虫がとまつてゐたところと少しも異がありません、それで今日先生に教へて頂いたことを思ひ出しました、

「お母さんも、姉さんも、そんな心配しなくつてもいいよ。」

と、言ひました、

「何故、如何して。」

「今日先生が仰有つたけれどもね、この優曇華と云ふの



はね、白露蟲と云ふ虫の玉子なんですつて、だからそんな何も悪いところがあるの何のつて心配しなくもいいんだよ。」

「さうかい、先生が仰有つたのかい。」

「え、白露虫の玉子が優曇華で、あの優曇華からまたかげらふが生れるんです、だから虫の卵だもの、ちつとも心配しなくもいゝんだよ。」

「さうかい、それちやあの優曇華からかげらふがうまれるんだね。」

「え、だから僕、ためして見ますよ。」



さう言つて正雄は一生懸命にランプの傍にゐて、優曇華の番をしてゐますと、その夕方、優曇華のさきの、青い玉が破れて、小さい白露蟲が澤山、薄い、すき通るやうな羽をひらく／＼させて飛び出しました。

「母さん御覧よ、ほら白露蟲が飛び出しましたよ。」

「おや、さうかい、ホンとだね、まあ綺麗だね。」
と、お母さんも感心して見てゐました。

その晩のうちに、お鶴の病氣もなほつてしまひましたお母さんも正雄も安心しました、それから、優曇華が咲いても誰も心配しませんでした。

二二 金魚と蛙

赤と白の金魚が二疋、お座敷の小窓のところに、涼し
 そうな硝子の丸い罎に入れられて、ゆつくり泳いでゐま
 した、折々軒場の風鈴がりんくと鳴るので、二疋はう
 れしがつてゐました、世の中にはこのびんの中ほど広い
 ところはないと思つてゐたのです、

ごころがある日のこと、ふと庭さきへやつて來たの
 は一疋の小さな雨蛙、金魚を見て、

「金魚さんく、お前さんたち二人は、毎日々々、そん



なせまいところにあて、どんなにか窮屈だらうね。』

と言ひました、しかし、びんより外のこととはちつとも
 知らない金魚ですから、

『ごうしてく、私はこんない所は無いと思ひますよ
 こんな廣々とした、綺麗なごころは、無いと思ひます
 ね。』

「冗談ぢやないよ、こんなびんの中が何の廣いもんか。』

「ちやもつと廣い綺麗なところがありますかい。』

「あるともく、このびんから外へ出て御覽、お池もあ
 れば川もある、綺麗な草や石が澤山ある、花もさいてる



鳥も啼いてる、それはくゝいゝ所だよ。」

「さうかね、左様よい所があるなら、ちよつと行つて見たいものだ。」

「譯はないよ金魚さん、行きたきあわたしが連れて行つてあげやう。」

「ちや、雨蛙さん、ひとつ、左様云ふ都合に願ひますかな。」

と言ひますと、外の一疋が、

「だが雨蛙さん、此所から池や川まではずい分遠いから、中々わたしたちにや行けやしませんよ。」



「何の何の、わたしがギヤクゝ鳴きさへすれば、すぐに雨が降つて来る、そこでお前さんたちが、その雨水の流れについて来りや、譯なくお池へでも、川へでもすきな所へ行けますのさ。」

「さうかね、うれちや雨蛙さん、ひとつお願いいたしませうかね。」

「よろしい大丈夫。」

と、言つたかと思ふと、木の枝へスルゝと上つて、大きな口をバツとあいて、さも自慢らしく、

「ギヤアゝゝゝ、ゝゝゝ雨ふれギヤアゝゝゝ、雨ふれギヤア





く。』

と、頻りに鳴いてゐますと、その内に空が搔き曇つて来て、大粒の夕立がザーザーと降り出して来ました、すると屋根の樋から、丸い太い瀧のやうな雨滴が落ちて来ました、

『さあ〜金魚さん、もう大丈夫ですよ、わたしが案内しますから、早く思ひ切つてびんの口から飛び出しなさいよ。』

と、教へましたから、二疋の金魚もついその氣になつてピヨン〜飛んで出ますと、お庭へころがり落ちまし



た、

『さ、早く〜。』

『蛙さんのやうに、そんなにピヨン〜飛んちや、とても追ひつけません。』

『然し、今までとちがつて大川やお池へ来ると、愚圖々々しちやゐられないのだよ。』

と、蛙は先に立つて案内しながら川へ来ました、

川は廣くてよい所でした、然し水もそれほど綺麗ではなく、時々、雨が降つたり、子供が追ひかけたり、中々安心して泳いでゐられませんでした、二疋の金魚

は、

「廣くつてもいゝやうなものの、苦しいことも澤山あるやつぱりた座敷のびんの方がよかつた。」

「さうですね、でも出てしまつたのですから、もう仕方ありません、諦らめませう。」

と、言ひ合つてゐました。

一三 鷺の念佛

ある晩、一匹の大きな狐が、垣根を破つて鷺小屋へコツソリ忍び込みました、そこに細い川があつて、川端に



澤山の鷺が寝てゐました、

「ヤあ、よく眠つてるなア、どいつも此奴もむくく肥つてゐる、旨さうだなア、どれから食べやう、丸で御馳走に招ばれて来たやうなものだ、へつく、エへつく……へつく……。」

と、ひとり語を言つて、コン／＼踊をはじめましたので、寝てゐた鷺が目をさました、見ると、自分たちのまくらもとには恐ろしい狐が一疋のつそり立つてゐます、驚いたの驚がないのつて、みんな青くなつてふるはりました、氣の弱い奴は、目を廻して川の中へ落こちまし



た、狐は大きな目をむいて、怖い顔をして、

『騒ぐなく、騒ぐと生命はないぞ。』

と、叱りつけました、驚どもはこの大きな狐に白眼られて、もう如何することも出来ません、恐れ入って首をのばして、頭を地にこすりつけて平伏しました、

『エヘン、これ驚どもよく承はれ、其方どもはこの狐様が片つばしから食つてやるから左様思へ、然し、何か遺言があるなら訊いといてやるから申し出でろ、早く申せ早く。』

と大威張です、驚どもはもう生きてる心持はしません



どうなることかと、何とも言ふものはありません、

『これく、早く遺言を申せ。』

『へい、それでは私から申上げますさて……。』

と、一疋の黒い驚が恐るく前へ進み出ました、

『ウン、手前は黒か、大分うまさうだな。』

『へい、所がわたしは些ごも旨くは御座いません、私は貧乏ぐらして、不味いものはかり食べてゐますから、私の身體は石のやうに固く、たまけに筋ばつてゐて些ごも旨くはありませんから、どうぞ私だけは御ゆるしを願ひます。』



と、さも哀れつばく言ひますと、狐は大きな目をいか
らして、

「やい／＼、泣つ面アするな、うそつきめ、手前は一番
さきに食つてやるから左様思つてゐろ、引つ込んで待つ
てろ、その次は誰だ、早く出ろ。」

「へい／＼、私で御座います。」

「何だ足のねえ鷲か、何か言ふことがあるか。」

「へい／＼。」

と、片足の折れた鷲がよ／＼と進みいで、水つ鼻を
こすりながら、



「私は御覽の通り年もとつてますから、お食べなすつて
も旨くは御座いません、へい年老で御座いますから、ど
うぞ御助けなすつて下さい。」

「駄目だ／＼、手前のやうな老年鷲はいつ死んでもい
のだから、勘辨することは出来ねえ、許すわけにや行か
ない。」

「おや／＼、南無阿彌陀佛々々々々々々。」

「次は誰だ、別嬪の女鷲か。」

「はい／＼、どうかお狐様、私の申すことを一通り御訊
き下さいまし、私はもと此所のもものでは御座いません、





馬鹿な狐の
コン／＼踊り
踊つて跳れば
驚さん
念佛となへて
ふるえてる
ガア／＼ブツ／＼
コン／＼／＼

驚の念佛

童話

正男作



驚の念佛

遠い所で生まれました、故郷にはお父さんもあればお母さんもあります、どうか一辺お父さんやお母さんに逢つてから死たいと思ひます、弟もありません、妹もありません、弟は七十三で、妹は八十五です、お父さんは十八で、お母さんは十五ですから、是非どうか一目逢はして下さいまし。」

「やい／＼、弟が七十三で、お父さんが十八だなんて奴があるか、ゆるすことは出来ないから左様思へ。」
「でも御座いませうが御狐様、御コン様、ごうか御助け……………」



鷺の念佛

遠い所で生まれました、故郷にはお父さんもあればお母さんもあります、どうか一辺お父さんやお母さんに逢つてから死たいと思ひます、弟もありません妹もありません、弟は七十三で、妹は八十五です、お父さんは十八で、お母さんは十五ですから、是非どうか一目逢はして下さいまし。

『やいく、弟が七十三で、お父さんが十八だなんて奴があるか、ゆるすことは出来ないから左様思へ。』
『でも御座いませうが御狐様、御コン様、ごうか御助け…………。』

童 謠

鷺の念佛

正男作

馬鹿な狐の
コン〜踊り
踊つて跳れば
鷺さん
念佛となへて
ふるえてる
ガア〜ブツ〜
コン〜



「うるさい、御饒舌め。」

「ヒヤア。」

と、女鷲もすごく引き下りました、するこ、こんどは若い生意氣の鷲が、

「やア狐先生、え、初めて御目にかゝりますが、僕は平和主義と云ふことを考へてゐます、鳥でも獸でもた互ひに仲よくしたいと思ひます、人間の方でもフランスのベルサイユと云ふ所で講和會議を開いて、國際聯盟と言ふことを相談してゐます、われ／＼も狐君と講和會議をひらいて……………」

いのであると存じ奉ります。』
『ウーン、左様だらう、さるが故にざらざる可からないのだ。』

『就きまして、最期の願と云ふものがありますが、ひとつ將軍閣下殿様の御聞届を願ひます。』

『何だ、それは。』

『イヤ、他でも御座いませぬ、私どもは今まで菜はつまむや、大根は突付くやら、水を汚すやら、イヤハヤ、誠に悪いことばかりいたして來ましたが、この儘死んだのではとても極樂へ參る譯には行きませぬ、そこで、ひと



つ死ぬ前に御念佛を申上げて、佛様に御詫びをしたいと思ふので御座いますが、此儀御聞き届けを願はしう存じ奉ります。』

こ、四角ばつて言ひますので、狐もすつかり煙にまかれて、

『よし、念佛だけはゆるしてやらう。』

『へエ、どうも有り難う存じます。』

こ、老年鷲は仲間の方をむいて、

『さて諸君よ、唯今御聞の通り狐將軍閣下から、しばらくの間御念佛を申すことをゆるされました、そこで私が



第一番に念佛を申しますから、諸君もその通りに念佛を唱へて下さい。

「はいく承知しました。」

「では、閣下はじめます。」

と、白い年老鷺は、狐に叮嚀に叩頭をして、胸を前方へ張つて、首を長くのばして、

「ガツクく、ガツくくく。」

と、お念佛をはじめました、すると、二番番のも同じやうに胸を張つて、首を長くのばして、

「ガツくく、ガツくくく。」



三番目のも、四番目のも、みんな分のわからぬ御念佛を唱へはじめました、何十疋の鷺が一度に聲を揃えて啼くのですから大さわざです、この騒ぎに小屋の番人が目をさました、そして来て見ると、大きな狐が小屋の中へ入つてます、

「此ん畜生、鷺をとりに来やがつたな。」

と、丸太で狐を一打ち、狐はキヤツと言つて死んでしまひましたので、鷺はお念佛をやめました。

一四 禿頭林檎





五郎さんは、お母さんに連れられて汽車に乗って田舎の親類へ行きました、始めて汽車に乗った五郎さんは何もかも珍らしくつて、窓の外ばかり見てゐましたが、そのうちに、外の景色も飽きたと見えて、こんどは室内を見廻しました。

すると、五郎さんの筋向ふの腰掛に、年頃六十ばかりのお爺さんが新聞を讀んでゐました、そのお爺さんの頭は、つろくに禿げてゐて、後の方に少し毛があるだけでした。

「母さんく〜。」



ご、五郎さんは何か大発見でもした時のやうに叫びました。

「静かになさいよ、何です。」

と、母さんが言ひました。

「御覽よ、あの人を、赤坊のやうな頭ね、ねえ母さんてば。」

「そんな事を言ふんもんぢや無いよお前、聞えろと悪いよ。」

と、母さんは小聲でとめました、五郎さんは訊きません。



「何故言つちや悪いの、え、母さん。」

と、また五郎さんは禿頭の方を見てゐるのです、でも五郎さんはまだ五歳ですから何にも分らないのです、

「母さん、あの人の頭は何したの。」

「そんな事訊くもんちやありませんよ。」

「何故、どうしたの、あの頭さ。」

「しやうがないね。」

と、母さんは五郎の耳に口をつけて、

「あれはね、頭が禿げたのよ。」

「禿たつて何の事、ね、母様。」



母さんは、餘り五郎さんが大きな聲で禿々つて言ふので、びつくりして横に抱きあげて耳に口をつけて小さな聲で、

「禿つてね、お頭に毛のないこと、抜けて終つたの。」

「さう、頭に毛のないことなの、抜たの、母さま、僕のも抜けるの、え、いやになつちまふな、抜ければ僕もやつぱり禿頭だね、いやだなア、禿頭ちやいやだい。」

「いけませんよ坊や。」

と、母さんは恐い顔をして五郎をにらみました、叱られて五郎はしばらく黙つてゐました、片側の硝子の窓か



ら入る日の光が、てらくくご禿頭に照りかへすのを、見ておりましたが、そのうちに蠅が一疋、お爺さんの禿頭に泊りましたが、頭が禿けておてつるくくしますから、中々ごまることが出来ません、

『母さん御覧よ、あれ禿頭にハイがとまつたよ、あれ、ハイがすべつた。』

『これ、五郎さん。』

『あ、また一疋飛んで来た、やあ喧嘩をやつてらア、面白いなあ。』

『おだまりといつたら、仕方のない子だね、お家へ歸つ



たらお父様に言ひつけますよ、いいかい。』

『ウーン、厭だア。』

『ちやおだまりなさい。』

その時まで、だまつて新聞を讀んでゐた禿頭の爺さんは、新聞をそばに置いて、眼鏡を外しながら、

『奥さん、大分能辨な坊ちゃんですな。』

『どうも相濟ません。』

と、お母さんは眞赤になつてお爺さんに詫言いました、そして五郎を抱くやうにして自分の傍へ引きよせ、

『仕方ないわね坊やは。』



「やあ、ハイがまだあらア、二つ、三つ、四つ、五つあ
らア、坊の年だけあらア。」

「本當によく嘔づりますな。」

と、お爺さんはちろりと睨みましたが、五郎はさつば
り恐いとは思ひません、お母さんは眞赤になつて五郎を
胸に引きつけて、

「おだまりつて言ふのに、坊やは仕方のない子だね。」

「母さんは、泣き出しそうな顔になつて、五郎をとめる
のですが、腕白やの五郎さんは一向平氣です、

「母様、坊やの頭も禿るのね。」



「これ、およしつて言ふのに。」

五郎はそれでも構はないで、こんどはお爺さんの方を
見て、

「お爺さん、禿頭になると寒かあなくつて、え、お爺さ
ん。」

と、言ひました、お爺さんはこわい目をギョロ／＼光
らせましたが、

「坊ちゃん、いゝ兒だから少々だまつてをいで、いゝ物
をあげるよ。」

と、袂へ手をいれると、眞赤な林檎をひとつ出してや



らうとしました。五郎は變な顔をして見てゐましたが、
 「母さん、貰つてもいいの。」
 「え、お貰ひ申しなさい。」
 と、母さんは言つて、お爺さんの方をむき、
 「あなたどうも恐れ入ります。」
 「いや、なあに。」
 「お爺さん御馳走様。」
 「や、こりやお利口だ。」
 と、お爺さんは御愛嬉を言つて、又新聞を讀みはじめ
 ました。林檎を貰つた五郎はしばらくだまつて、林檎と



お爺さんの顔を見くらべてゐました。やがて次の停車場
 へ來ると、お爺さんは窓の扉をあけて外へ出て行きまし
 た。
 「母さん、坊も禿頭になると、子供に林檎を呉れるんだ
 ね。」
 「これ、坊や。」
 「母さん、此の林檎ね、禿頭のやうにてらく光つ
 てますね。」
 と、言つて、この林檎を窓硝子の方へ出したので、今
 まで、難かしい顔をして、五郎の様子を見て居た瀧車の

中のた客は、俄かにドツと笑ひ出しました、五郎は變な顔をして母さんにしがみつきました。

一五 張番小僧

お寺の和尚さんが、他から柳の枝を貰つて来て、これを挿木にしやうと思つて、垣根のそばへさして置きました、斯うして置くと、やがて根が出て、芽が吹いて來るのです、そこで小僧を呼んで、

「これくゝ小僧、こゝへ柳のさし木をしたが、他の惡戯兒が來て抜くかも知れないから、よく張番をしてゐてく



れ。」

と言ひつけました、

その日から、小坊主は竹椽に机を出して手習をしながら、その柳のさし木の張番をしてゐました、七日ばかり経つと和尚さんは庭へ下りて柳のさし木を見てゐました

「これくゝ小僧、よく番をしてくれたと見えて誰も抜いて行かないやうだな。」

「はい、私がよく番をしてゐたからです。」

「それにしても、餘り勢がよわくつて、悄れさうになつ



てるが、一体どうしたと云ふんだらう、まだ根が生えないのかしら。」

と、不審に思ひながら、和尚さんは行つてしまひました、

また二三日経つてから来て見ますと、柳はやつぱり其所にありますが、どうしたもののか、前よりはもつと威勢が弱くなつてゐます、今にも枯れさうになつてゐますから、和尚さんは不思議さうに首を傾けて、

「どうしたのだらう、こりや奇怪い。」

「和尚様何ですか。」

と、竹椽で勉強しながら張番をしてゐた小僧が言ひました。

「この柳のさし木だが、どうも今にも枯れそうになつてゐるが、どうかしたのか變だよ。」

「へい、左様ですか。」

「お前何かいたづらをしたのぢやないか。」

「いゝえ、悪戯なんかしません。」

「どうも、然しこのやなぎが枯れる譯がないからな。」

「でも私はいたづらなんかしません、和尚様の大切のやなぎですから、晝間は斯うして番をしてゐますし、夜に





なつて、もしや子供に抜かれちゃ何にもならないと思ひ
 ましたから、いつも日の暮れがたになると引きぬいて箱
 の中へ入れてをきました。」

「何、夜になると抜いてをいた。」

「はい、さうして又朝になるとさしてをきました。」

「は、は、は、は、わ前は何と云ふ馬鹿だらう、さし木を抜い
 て置く奴があるものかそれだからかれてしまつたのだ。」

は、は、は、と大笑ひをしました。

賢い小犬終

大正十一年一月二日印刷
 大正十一年一月三日發行

【定價五十錢送料四錢】

著者 初島 順三 郎

發行者 東京市淺草區瓦町二十四番地
 中村 惣次 郎

印刷者 東京市神田區豊島町三十四番地
 小笠原 幸吉

發行所 東京市淺草區瓦町二十四番地
 中村 書店

(電話下谷四九三一番)
 (振替東京一一六一六番)

童話集
 賢い小犬

定價 金五錢 冊一
 送金 料四 冊一
 童話新集

第一編	狐の恩返し	第十一編	森の女神
第二編	銀色の小鳥	第十二編	賢い小犬
第三編	小猫大盡	第十三編	鸚鵡さん
第四編	鶏の時計	第十四編	小さい林檎
第五編	山羊のお母さん	第十五編	愛子さん
第六編	蛙の王様	第十六編	お庭の柿
第七編	猿の医者様	第十七編	あひるの大王
第八編	鴉のお詫び	第十八編	キューピーの眼玉
第九編	お鶴の九官鳥	第十九編	梟の大臣
第十編	小雀三羽	第二十編	おしやべり雀

105
8

終